

図書館だより

Bulletin of the Hokkai Gakuen University Library

サルバドール・ダリの「^{ひょうせつ}剽窃」

小林 英 樹

剽窃とは画家や文学者が他人の作品から何かを^{かす}掠め取る行為であるが、なぜか、絵画の場合はかなり露骨であってもその特殊性からか、必ずしも悪とされない。取る側が偉大であれば、妙な言い方に聞こえるかもしれないが、かえって剽窃される側の評価となることすらある。

剽窃で有名なのはピカソだ。モジリアニなどエコール・ド・パリの画家たちは自分の展覧会場にピカソがやってくるのを怖れた。多くの画家たちが巨人ピカソの餌食とされたが、中でもピカソの好物はマティスであり、素描など多くが剽窃された。ピカソは、何食わぬ顔で、流麗で気品のあるマティスの美しさとはまったく別の、ほんの少し泥臭い骨太の魅力を作り出してしまう。しかし、あまりに偉大ゆえに世間がピカソに寛容なのか、あるいは、ピカソは画商のドル箱だからなのか、誰もピカソを責める者はいない。絵画の分野で剽窃が大きな社会的問題になったことはない。

シュールレアリズムの代表的画家サルバドール・ダリは二十世紀が生み出した天才の一人であるが、彼もまた剽窃によって1930年代の初めころ大変身を成し遂げた。しかし、ダリの名誉のために強調しておかなければならないことがある。それは、剽窃の対象が過去の画家に限られること、ピカソが一枚一枚図柄すべてを拝借したのに対して、ダリは二点（わたしの知る限り）の作品の一部をターゲットにしたに過ぎないこと、さらに、剽窃した一部がダリの世界誕生につながったという点で暗示や示唆に近いということである。

とはいうものの、やはり、その二点がなければ

現在あるダリの世界が生まれたかどうかは疑わしいほど大きな影響を受けている。ダリの剽窃した部分と、そこに潜んでいた発想上のヒントは生涯十分有効であるほど大きく、しかも、単に「影響を受けた」というよりも「部分をそっくり真似た」というべき性質なのだ。もちろん、それを生かしたのは時代を先取りする天才の直感的な閃きがあつての話ではあるが。

その二点とは、グレコの『トレドの眺望』とフェルメールの『デルフトの眺望』である。後者はダリ自ら繰り返しフェルメールを讃えているので自他共に認める剽窃である。その陰にあつて、その何倍もの恩恵に浴しているのが『トレドの眺望』である。フェルメールのものよりさらに眠気を誘うどんよりとした白い綿雲、遠景まで鮮明に見晴らせる景色、化石化した褐色の人物、宙を飛ぶ不思議な物体、茶褐色の遠景の岩肌に結晶のように這いつく建物群、光と黒い影等々、どれもダリの絵と見間違えるようなものばかりである。

『トレドの眺望』はダリ自身の深層心理を刺激する宝庫であつたに違いない。そこには無数の巨匠ダリの絵画のヒントが眠っていた。だが、グレコと同じスペインの画家であるダリは、このことを明らかにしたことがない。マドリッドからバスで一時間少し、トレドのグレコ住居跡を開放した美術館の奥の暗い一角に『トレドの眺望』が掛かっているが、誰一人それがダリに決定的な影響を与えた作品であるとは知らずに通り過ぎていく。

(こばやし ひでき/工学部教授)

- p.1. サルバドール・ダリの「剽窃」 ■ p.2. 戦争と平和 ■ p.3. ブランド戦略論への招待②
- p.4. 庭のはなし(二) ■ p.5. 人々の生涯学習を総合的にバックアップする担い手として
- p.6. 検索ガイド ■ p.7. 日本児童文学史展 ■ p.8. 「ライブラリーカード」

戦争と平和

——シカゴ追想・2——

君島東彦

8月6日から11日まで、わたしがかわっているNGO「非暴力平和隊」の日米の若いメンバーが長崎に集まって会議を開いた。わたしも2年ぶりに長崎を訪れた。若者たちといっしょに、被爆者の話を聞き、長崎市の平和行政担当者に会い、原爆資料館を見、9日の平和祈念式典に参加した。これら「ナカサキ」が「放射」するメッセージは非常に強力なもので、それに接した者の思考と心を揺さぶらずにはおかない（もちろん「ヒロシマ」も同じである）。わたしも改めて、核兵器および核兵器廃絶について、考えさせられた。

核兵器は実はシカゴと関係が深い。米国はナチス・ドイツよりも先に原爆を開発することをめざして、1940年代初頭にマンハッタン計画を始動させたが、原爆開発への重要なステップである核分裂連鎖反応は人類史上初めてシカゴで起きたのである。また、シカゴでは核兵器がもたらした政治的インパクト——平和の希求——も大きかった。

原爆開発にはヨーロッパから亡命してきた核物理学者がかかわった。なかでもイタリア人、エンリコ・フェルミの貢献が大きい。すでに1930年代半ばに核分裂連鎖反応の可能性を理論的に示唆していたフェルミは、1939年米国に亡命し、まずニューヨークのコロンビア大学で、続いてシカゴ大学に移って研究を続けた。シカゴ大学冶金研究所でフェルミを中心とするグループが研究を進めた結果、1942年12月2日、シカゴ大学のスタック・フィールド（フットボール競技場）のスタンドの下につくられた原子炉で、史上初めて核分裂連鎖反応が起きたのである。

スタック・フィールドがあった場所には、いまはシカゴ大学レーゲンシュタイン図書館が立っている。図書館の敷地の一角、人類初の原子炉の跡に、現在、それを記念するヘンリー・ムーアの彫刻「核エネルギー」が立っていて、こう書き添えられている。「1942年12月2日、人間はこの地で最初の核分裂連鎖反応を手に入れ、核エネルギーの制御された解放の道をひらいた」と。本当に「制御された解放」だろうか？ その後、原爆開発の中心はニューメキシコ州に移り、1945年夏、原爆は完成した。

ナチス・ドイツへの対抗から始まった原爆開発であるが、ドイツは原爆が完成する前に降伏したため、日本への原爆使用の可能性が出てきた。それに対し、事前警告なしに日本に原爆を使用することに反対する科学者の報告書が1945年6月11日にまとめられている。これはシカゴ大学冶金研究所に設けられた、ノーベル物理学賞受賞者ジェームズ・フランクを委員長とする委員会の報告書である。このフランク委員会報告書は、原爆はまず無人地域で示威行為として使用すべきであり、いき

なり日本攻撃に使うべきではないと主張した。報告書はまた、戦後の核軍備競争を予見し、それを防ぐための核の国際管理の必要性を訴えた。しかしこれら原爆開発にかかわった科学者の意見が米国政府の政策に反映することはなかったのである。

原爆投下直後の8月12日、「原子力、その人類に対する意義」と題するラジオ放送の中で、シカゴ大学学長ロバート・メイナード・ハッチンズはこう述べている。「先週の月曜日までは、正直に言って、わたしは、世界国家に対してあまり希望を持っていなかった。しかし、世界国家をつくらなければどうなるかが、いまやハッキリとわかってきた。世界組織をつくり、それに原子力を独占させる以外に、戦争を廃止する望みはまったくない」。

ハッチンズがいう世界国家、あるいは世界連邦の構想は、その後、大きな運動となって展開した。ハッチンズ自身は、1945年末、シカゴ大学の政治学者など6人に他大学の学者を加えた11人のメンバーで「世界憲法起草委員会」をつくり、2年半の検討ののち1948年3月、「世界憲法予備草案」を発表した。この世界憲法草案はふつうシカゴ草案と呼ばれる。

シカゴ草案は、正義の確立を平和の先決条件として、正義としての人権保障を第一の任務とする広汎な権限を持った世界政府を構想する。保障すべき人権の中では経済的平等と人種差別撤廃が重視され、また人間の生活に不可欠な四大要素たる土地、水、空気、エネルギーは人類の共同財産とされ、共同の福祉に従うべきだとする。

シカゴ草案が発表された頃から冷戦は本格的になり、世界は統合、協調よりも分断、対決に向かっていった。シカゴ草案も急速に忘れられ、シカゴ大学の国際政治学は、ハンス・モーゲンソーを中心とするリアリズムが基調となる。いまシカゴ草案のことを尋ねても、シカゴ大学の教員はこのことをほとんど知らない。

現在、グローバル・ガバナンス論というかたちで、あるべき世界秩序が議論されているが、これはある意味では世界憲法シカゴ草案の「再生」とも思われるのである。

(きみじま あきひこ/法学部教授)

お薦めの「本」
長崎総合科学大学平和文化研究所編『新版 ナカサキ——1945年8月9日』岩波ジュニア新書
C.G.ウィーラマントリ『核兵器と科学者の責任』中央大学出版部
高木仁三郎『核の世紀末——来るべき世界への構想力』農山漁村文化協会
毛利勝彦『グローバル・ガバナンスの世紀』東信堂
<http://www.jca.apc.org/~nyvp/> 非暴力平和隊ウェブサイト

ブランドの捉え方。～二つの視角～

伊藤 友章

何故ブランドが、企業に競争優位をもたらすのかを明らかにするには、そもそもブランドとは何なのだろうかといった本質を明らかにしなければならないだろう。ブランドを考える時には、最近では大きくわけて二つの見方に集約されそうである。

一つは、消費者の記憶の中にある知識構造、より具体的には消費者がブランドから連想する様々な事柄をブランドの本質として捉える見方である。代表的なものとしては、K. Kellerの「戦略的ブランドマネジメント」(東急エージェンシー出版部)が挙げられる。Kellerは、ブランド認知とブランド連想からなるブランド知識構造をブランド・エクイティの源泉として捉えている。とりわけここで重点がおかれるのがブランド連想である。多くの論者は、図表にあるように、ブランド知識を連想のネットワークモデルから捉えている(D. Iacobucci 編著「マーケティング戦略論」ダイヤモンド社)。そして、それらブランド連想が、ブランドが付与されていない場合と比べて差別的な効果を持つ時に、ブランドは価値があると考えてるのである。(ここで、ブランドから連想するものは、単にそのブランドの付与される製品の特性だけではないという点に注意されたい。次回述べる予定であるが、製品以外の連想する事項が競争優位の源泉としてのブランドの価値を特に大きく左

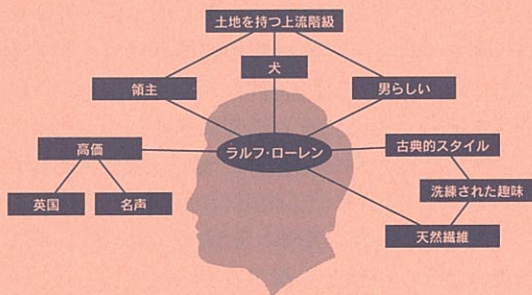
右することになるのである。)

もう一つは、ブランドは消費者の記憶の中にある既存の知識だけではなく、売り手である企業が、消費者に抱いてほしいと考えるものとして捉える見方である。この場合、ブランドは、企業側が抱えているものということになり、戦略的なビジョンや戦略的な意図といったものと非常に近いものとなる。前回紹介したAakerの著書では、ブランドアイデンティティを「ブランド策定者が創造したり、維持したりしたいと思うブランド連想のユニークな集合である」と定義づけ、消費者の既存のブランド知識をブランドイメージとして、アイデンティティとは区別している。その後の著書でも、この点は重視されている(D.A. Aaker 著「ブランドリーダーシップ」ダイヤモンド社)。

前者の立場で捉えると、現在時点での消費者の当該ブランドに関する知識を起点として、戦略を組み立てるという発想になり、望ましいブランド知識をいかに創造していくか、という視点に欠けることになる。しかしながら、後者の見方をする場合でも、どんなに、企業が自社ブランドに対してこのような連想を抱いてほしいと願っていても、消費者自身がそうした連想を抱かなければ、価値はないことは明らかである。最近では、この二つの見方を統合して、消費者と企業がブランド知識を共有していることの重要性を強調する見方もあらわれている(阿久津・石田著「ブランド戦略シナリオ」ダイヤモンド社)。そうしたことから、まずは、前者の立場にたちながら、消費者のブランド知識が購買意思決定にどのような影響を与え、それがいかに競争優位に繋がってくるのかを考えることが、ブランド戦略を考える上での出発点であるといつて良いだろう。ブランドを消費者の知識構造として捉えることは、曖昧なブランド概念をある程度確定する上でも、有効である。そこで今回は、この消費者のブランド知識が、どのように競争優位に繋がってくるのかを明らかにしていきたい。

(いとう ともあき/経済学部助教授)

消費者のラルフ・ローレン・ブランドに対するブランド連想



出所) A. Tybout & G. Carpenter「ブランド創造とマネジメント」(D. Iacobucci 編著「マーケティング戦略論」の二章より)

庭のはなし (二)

川上武志

聖書では人間の歴史はアダムとイブの楽園からの追放から始まる。その物語である J.ミルトンの『失楽園』(1667)によると、楽園の外観は、(神への復讐に燃えるサタンが丁度エデンに到着した場面で)「その広く平坦な頂きは、田舎屋をかこむ青垣のような緑の‘囲みでぐるりと蔽いめぐらされ、その頂に到る荒々しく険阻な山腹は、蓬々たる茂みで鬱然として蔽われ、一種異様な美しさと荒々しさを漂わせ……」と描かれており、山上にある‘囲まれた’場所となっている。エデンが山上の楽園であるのは、中世からの伝統のようである。「天国は天の蒼穹の上にあつて、楽園は蒼穹の下の陸にある」となると、そこが必然的に天国に近い高山の頂になるということも頷ける。その後、エデンはそれなりの広さがあったのではないかと考えられた。あまたの冒険者たちの海洋遠征が、楽園探しの旅でもあったのは、エデンはノアの洪水の折に消失したとされ、場所を特定するのが困難となっていたからである。

最初エデンは囲まれておらず、どうやら‘開かれていた’所であったことは前に触れたが、中世での理想の庭は‘囲まれた’所となる。そして、この考えの根拠は、主に『雅歌』の次のような箇所求められる。「私の妹、花嫁よ、あなたの愛は美しくぶどう酒よりもあなたの愛は快い。」という句のあと「私の妹、花嫁は、閉ざされた園。閉ざされた園、封じられた泉。」とあり、このあとに再び官能的な表現が続く。『創世記』にも、神はアダムを追放した後に、楽園を不浄で罪深い世界から遮断するために、「命の木に至る道を守るために、エデンの園の東にケルビムと、きらめく剣の炎を置かれた」とある。こうして楽園たる庭は‘閉ざされる’ことになった。

さて、中世の‘閉ざされた’庭は聖と俗の二つの方向をたどる。前者は〈キリストの庭〉とも呼ば

れる修道院の内庭となり、後者は封建領主の城館内部の一隅にある庭で、専らバラが植えられ、恋人がそっと忍び込む〈享楽の庭〉となる。ついでながら、西洋ではバラは伝統的に愛の象徴であり、人間の墮落以前はそれには棘がなかったとされる。そうなると、上にあげた『雅歌』の艶めかしさも理解できるということになるが、いずれにせよ聖愛(アガペ)と性愛(エロス)との違いはあっても、庭は常に愛と結びついていた。

閉ざされた庭には一定のコンポジションがある。それは基本的には四分された庭園で、中央に泉(生命の源として水)とそこから流れる水路があるもので、十字軍がイスラム世界で発見したものであった。さほど水に困ったと思えない西洋世界は、その水路に宗教的な意味を加え、エデンから発し四つに分流する河川とした。ミルトンの『失楽園』ではこのあたりの様子は、「ひとつの大きな川がエデンを貫いて南へ流れており、……地下に潜った水脈は噴出して清冽な泉となり、そこからさらに多くの細流となってこの園を潤していた。そのあと再び合流し、……また分岐して四つの大きな河となり、それぞれの方向に流れ、多くの由緒深い国々の間を經めぐっていた。」となっている。当然ながら、庭には芳香漂わせる草花や脇に配される果樹(園)も欠かせないものであるが、花は色よりも匂いのほうが重要であった。花を咲かせ実をつけるという植物の豊穰さは(地神とも関連づけられるが)生殖行為の結果にほかならず、果実を摘むことは性行為を暗に意味した(アダムとイブの楽園からの追放は、‘禁断の果実’を摘んだことによる)。また、果樹(食用)ともに、特に、修道院ではハーブ(薬用)が植えられたが、庭にはこのような田地とも繋がる実用性もあったことをつけ加えておく。

(つづく)

(かわかみ たけし/人文学部教授)

人々の生涯学習を総合的にバックアップする担い手として

高倉 嗣 昌

「人はやり方いかんによっては死ぬまで成長発達をとげることができる」。これが生涯学習の基本的な考え方である。学習はいつの世にも重要であるが、今日ほど重要視されている時代はない。複雑化し大きく変化する社会、日進月歩の科学技術、そして高齢化。その中で、社会の変化や技術の進歩に遅れず、さらに世の中を先取りするような発想や行動力、そして老後の生きがいある人生、それらを獲得していくには広く長期的な視野に立った計画的な学習こそが基本である。現代社会を生きていくには、すべての人々がそうした認識の下で学習を進めていかななくてはならない時代なのである。

しかし、それは各個人の自然発生的な自覚や、個別の学習活動に任せておいては進んでいかない。公的機関による普及活動や学習をしやすい環境を整えていくことが、何より大切である。

具体的には、その道の専門的な知識技術を修得した「専門職」の手によって進めていくことこそ最重要な手段であり、その担い手が社会教育主事なのである。

しかし、人々の生涯学習をバックアップする専門職は何も社会教育主事だけではなく、本シリーズで後に出て来る司書や学芸員も非常に重要な担い手である。

司書や学芸員は、図書館系施設、博物館系施設を拠点として、直接住民に接することが役割であるのに対して、社会教育主事は、本来そうした第一線から一歩しりぞいて、地域全体に目を配り、より総合的な立場から生涯学習を振興していくというのが役割で、そこに違いがある。現実には、社会教育施設の中で最も数多く設置されている公

民館や、青年の家・少年自然の家などの管理運営にあたっている場合も多く、その活動範囲は広い。

他方、学校教育こそ最有力な生涯学習であり、その意味で学校教員も生涯学習の担い手であるが、社会教育主事は主に成人の学習のバックアップにあたるという違いもある。その点で、教員のもつ専門生とは内容的に異質な面がある。

成人の学習のためのグループ・サークルづくりや支援、各種の学級講座等の学習機会の設定、成人の学習相談等々の対応などに加えて、生涯学習にかかわる地方自治体の事業評価や、民間活動をも視野に入れた地域社会教育計画の立案、それを裏付けるための社会調査の実施等がある。とりわけて重要視されるのは計画や評価であり、専門性に加え優れて総合性をもった職務といえる。

社会教育主事のそうした職務の重要性の反映として、都道府県市町村に必ず置かれなくてはならないことが、社会教育法で定められている。

その資格取得は、同じく社会教育法で規定されており、大学で学生が取得するコースの他にも、社会教育主事講習という短期講習で取得する道も設けられている。

したがって、大学で単位をとっても、実際に社会教育主事になれる可能性は高いとはいえない。しかし、これからはダブルライセンス、トリプルライセンスの必要な時代であり、教職などとの合せ技で、おおいに有利となる。

さらにたとえその道は開けなくとも、本課程で学ぶ内容は、個人的にもこれからの人生哲学の形成や人生設計の有力な糧となるもので、本来学徒として学んでおくべきことなのである。

(たかくら つぐまさ/経済学部教授)

検索ガイド

- OPAC (Online Public Access Catalogue : オンライン目録検索システム) コーナーが 5 席、2 F にありますので、自由に本学図書館の蔵書検索を行うことができます。なお、混み合っている時は、譲り合って利用してください。
- 蔵書検索について：
本学蔵書のうち、和書・洋書について下の表にある冊数分の蔵書検索ができます。なお、現在もデータ入力数を増やすべく努力中ですので、目録カードと併用で検索してください。

<OPAC 蔵書検索可能冊数>

	冊数 (約)
2 F	25,000
3 F	62,000
閉架書庫	200,000
工学部図書室	39,000

(平成 14 年 8 月 31 日現在)

- * 開架以外の資料や雑誌のバックナンバーについては、PC 横にある閲覧証に必要事項を記入のうえ、貸出・返却カウンターにこれを提出してください。
- * 上記の方法でも探している資料が見つからない場合は、貸出・返却カウンターやレファレンスカウンターにお越しください。
- 下記の URL で、探している資料がどの図書館にあるかを 3 階 PC ブースで検索することができます。
<http://webcat.nii.ac.jp/>
(皆さんがお使いの PC から接続して利用することもできます)
- * 図書館では他大学・公共図書館で持っている資料を調べたり、これらの図書館を利用する若しくはその資料を利用するための各種手続きをとることができますので、その際には前述のカウンターをご利用ください。



日本児童文学史展

～明治・大正・昭和の児童文学～

日時：平成14年9月2日～11月30日

場所：図書館1階自由閲覧室

1. 鬼桃太郎／尾崎紅葉著。—ほるぷ出版、1971。—(日本児童文学館：名著複製；1)
2. 當世少年氣質／大江小波著。—ほるぷ出版、1971。—(日本児童文学館：名著複製；2)
3. 宝の蔵／幸田露伴著。—ほるぷ出版、1971。—(日本児童文学館：名著複製；3)
4. 海底軍艦：海島冒険奇譚／押川春浪著。—ほるぷ出版、1971。—(日本児童文学館：名著複製；4)
5. 赤い船：おとぎはなし集／小川未明作；渡辺ヨヘイ画。—ほるぷ出版、1971。—(日本児童文学館：名著複製；5)
6. 猿飛佐助：真田三勇士忍術名人／雪花山人著。—ほるぷ出版、1971。—(日本児童文学館：名著複製；6)
7. 湖水の女：世界童話集／鈴木三重吉編；水島爾保布画。—ほるぷ出版、1971。—(日本児童文学館：名著複製；7)
8. かちかち山；花咲爺／武者小路実篤作；岸田劉生画。—ほるぷ出版、1971。—(日本児童文学館：名著複製；8)
9. トンボの眼玉／北原白秋著；矢部季、初山滋画。—ほるぷ出版、1971。—(日本児童文学館：名著複製；9)
10. ちるちる・みちる：童話集／山村暮鳥著。—ほるぷ出版、1971。—(日本児童文学館：名著複製；10)
11. ふるさと：少年の讀本／島崎藤村著。—ほるぷ出版、1971。—(日本児童文学館：名著複製；11)
12. 十五夜お月さん／野口雨情著；岡本帰一画。—ほるぷ出版、1971。—(日本児童文学館：名著複製；12)
13. 太陽と花園／秋田雨雀作。—ほるぷ出版、1971。—(日本児童文学館：名著複製；13)
14. 一房の葡萄／有島武郎著。—ほるぷ出版、1971。—(日本児童文学館：名著複製；14)
15. 大将の銅像／浜田広介著。—ほるぷ出版、1971。—(日本児童文学館：名著複製；15)
16. 家庭用児童劇／坪内逍遙著。—ほるぷ出版、1971。—(日本児童文学館：名著複製；16)
17. あやとりかけとり：日本童謡集／竹久夢二編。—ほるぷ出版、1971。—(日本児童文学館：名著複製；17)
18. 赤い部屋／宇野浩二著。—ほるぷ出版、1971。—(日本児童文学館：名著複製；18)
19. 西条八十童謡全集／西条八十著。—ほるぷ出版、1971。—(日本児童文学館：名著複製；19)
20. かみなりの子：童話集／江口渙著。—ほるぷ出版、1971。—(日本児童文学館：名著複製；20)
21. 蝗の大旅行／佐藤春夫著。—ほるぷ出版、1971。—(日本児童文学館：名著複製；21)
22. 三つの宝／芥川竜之介著；小穴隆一画。—ほるぷ出版、1971。—(日本児童文学館：名著複製；22)
23. トテ馬車：童話集／千葉県三著。—ほるぷ出版、1971。—(日本児童文学館：名著複製；23)
24. 木馬のゆめ／酒井朝彦著。—ほるぷ出版、1971。—(日本児童文学館：名著複製；24)
25. 赤い旗：プロレタリア童謡集／榎本楠郎著。—ほるぷ出版、1971。—(日本児童文学館：名著複製；25)
26. エミリアンの旅／豊島与志雄著。—ほるぷ出版、1971。—(日本児童文学館：名著複製；26)
27. 魔法：坪田譲治童話集／坪田譲二著。—ほるぷ出版、1971。—(日本児童文学館：名著複製；27)
28. 七階の子供たち：塚原健二郎童話集／塚原健二郎著。—ほるぷ出版、1971。—(日本児童文学館：名著複製；28)
29. 風の又三郎／宮沢賢治著。—ほるぷ出版、1971。—(日本児童文学館：名著複製；29)
30. おちいさんのランプ／新美南吉著。—ほるぷ出版、1971。—(日本児童文学館：名著複製；30)
31. 小学唱歌集／文部省音楽取調掛編纂；初編。—ほるぷ出版、1971。—(日本児童文学館：名著複製；付録)

名著複製日本児童文学館
1971～1974 (NDC：910.8/Me22) より

図書館の本を借りたい時、館内のPCやCD・DVDを使いたい時、欠かすことのできないものは何でしょう？ そう、ご存知「ライブラリーカード（以下「カード」と記載）」である。この「カード」はここ北海学園大学図書館で発行しているもので、普通の図書館で言うところの「貸出証」とか「貸出券」というもののことである。

「カード」について簡単に説明すると、表面にはバーコードが着いていて個人の情報（住所や所属はもちろん、貸出情報や延滞情報なども含む）を即時に確認できるというものである。裏面には、簡単な注意事項と自分の所属先・学生番号・氏名を個人で記入する仕組みとなっている。初回発行は無料であるが、紛失等で再発行する際には1000円かかる。入学と同時にID番号は与えられるのであるが、「カード」は自分で図書館に行き別途手続きをしないと得ることができない。なので、初めて利用する際には簡単ではあるものの「手続き」が必要なのである。

一見すると何も問題のないように思えるこの「カード」であるのだが、まだまだ改善の余地があると思う。今回はその「カード」について、以下の2点について考えてみた。

まず第1点目は「手続き上の問題」である。先にも書いた通り、初めて利用する際には簡単ではあるが手続きが必要である。この手続き、記入用紙に必要な事項を記入して「カード」の裏面に名前

等を書くだけなのであるが、手続きの時間によっては即時発行ができない（翌日発行）のである。社会人など時間の制約がある学生も多い大学において、このような方法はベストであるとは言えないのではないだろうか。

第2点目は「カードを忘れやすい」ということである。これは利用者自身の問題であるのだが、実際このような人が多いのである。理由は人それぞれであるが、「利用頻度の低いものは常時携帯しない」という声が多く聞かれる。この改善点として「学生証との一体化」が便利ではないかと思う。学生の大半は「学生証」を携帯している。その理由は、学生証は校内ではもちろん外に出ても身分証にもなるし、「学割」等の恩恵も受けられるからである。学生証には本人の写真も添付しているので、本人確認等の面でも安心することができる。1点目の話に戻るが、この方式ならば余計な手続きを経ることもなくスムーズに貸し出し出来るように思える。

以上のような問題点を私個人として考えたのであるが、このような問題はその恩恵を受ける人（ここでは利用者である学生）の声が無いと、取り上げることも改善されることもない。どんなに些細なことからも良い、みんなで考えていこうではないか！

（いまい たかお／大学院経済学研究科

経済政策専攻修士課程）

編／集／後／記

*今年も夏も早々に終わり、もう秋ですね。秋と言えば色々な秋がありますが、読書の秋などいかがでしょう。秋の夜長に心をより豊かにするために、それよりも夏冬と比べて断然過ごしやすい図書館を満喫するために。きっと、図書館へのイメージが変わりますよ、いや、変えて欲しいので是非来てください。

*楽しい期間と苦しい期間がまとめてあつという間に過ぎ去った今日この頃。さて、これからどう過ごそうか迷っているあなた。迷う前に！！夏休み明けでもまずはきちんと学校へ行きましょう。夏休みボケを早く治さないと気付けばそこにはもう後期の試験が……なんてことになっていますからね。

北海学園大学附属図書館報 図書館だより Vol.24 No.2 (通巻162号)

本館 〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号 工学部図書室 〒064-0926 札幌市中央区南26条西11丁目1番1号
☎(011)841-1161 本館内線 270・275・279・129 工学部内線 813・814 印刷所：(株)アイワード